

1980年出土の木簡

- 1 所在地 和歌山県有田郡吉備町野田
- 2 調査期間 一九八〇年（昭55）五月～一九八一年（昭56）二月
- 3 発掘機関 和歌山県教育委員会・和歌山県文化財研究会
- 4 調査担当者 藤井保夫・渋谷高秀
- 5 遺跡の種類 寺院跡、水田跡、集落跡
- 6 遺跡の年代 先土器時代～室町時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要
- 野田地区遺跡は、有田川下流域の左岸に位置する。その地形は、沖積平野と河岸段丘によつて構成され、標高約一三～一五mを測る。
- 発掘調査は、海南、湯浅道路建設工事に伴い、日本道路公団より委託を受けて実施した。
- 検出した遺構は、段丘上からは、鎌倉時代後半の觀音寺跡に関連すると考えられる掘立柱建物跡や区画用の溝跡、また大溝跡などを検出した。沖積平野と河岸段丘の境界からは、弥生時代後期から室町時代に至る溝群を調査区内約一五mにわたつて一〇条検出した。大溝群は、時代によつて、層位、流路、規模、溝底高を変えているが、平野と段丘の境界といふ位置は、各時代共に共通である。溝群

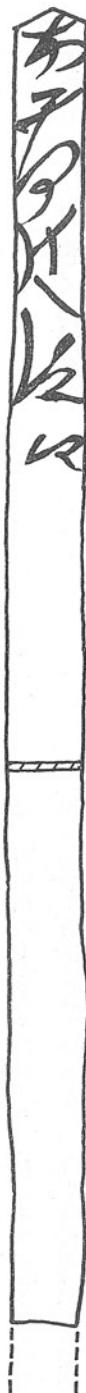
は、有田川の氾濫や段丘よりの落込み等の条件に規定され、比較的短期間で廃絶されてゐるため、弥生時代後期、古墳時代中期、奈良時代後半、平安時代前半、平安時代中～後半、鎌倉時代前半、鎌倉時代後半、室町時代前半に比定される各時期別の土器類、木器類を一括でうることができた。

木簡が出土したのは、標高一〇・七mで検出した溝からである。溝は、幅三m、深さ〇・五mを計り、溝内堆積土は、大きく三層に分けられる。上層・中層は、砂層と粘土層で、八世紀後半の土器を含む。下層は、流れ堆積をしめす砂礫層である。木簡は、この下層より出土した。他に人形二点等も出土した。

笹塔婆が出土したのは、標高一二・六mで検出した溝からである。溝は、幅一・五m、深さ〇・五mを計り、両肩には、径八cm前後の丸杭を垂直に打ち込み、護岸している。溝内堆積土は、大きく一層に分かれる。上層は砂層と砂礫層の互層で、一四世紀を前後すると思われる土器を含む。笹塔婆は、上層の砂礫層上面より数百点が、一ヶ所に集中して出土した。一部、下層の砂礫層中よりも出土する。笹塔婆の他には、曲物、はし、ザル、うるし塗皿、塔婆等多量に出土した。

8 木簡の釈文・内容

(1) ×□五□×



木簡(5)



木簡(4)



木簡(3)



木簡(2)



木簡(1)

(2)～(5)の笠塔婆は、頭部を圭頭状に切り、六字名号のみを書写したものである。詳細は調査報告書に譲りたい。

(渋谷高秀)

- (2) 「南無阿弥陀仏」
 (3) 「南無阿弥陀仏」
 (4) 「南無阿弥陀仏」
 (5) 「南無阿弥陀仏」

(172)×10×1 019

(172)×10×1 019

(163)×10×1 019



(海南)